

---

# きっとテンプレじゃない転生？

天津かれま

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

きつとテンプレじゃない転生？

### 【Nコード】

N7676Z

### 【作者名】

天津かれま

### 【あらすじ】

なんだか幼なじみがうるさいのでスルーするとえらい事になった

## すたーと（前書き）

片方更新停滞しているのにこの始末どうしようか……

すたーと

「なあ、私は最近思うんだよ」

俺の腐れ幼なじみが唐突に俺の部屋に乗り込んできて俺に話し掛けてきた。

「何をさ、主語を言え主語を」

「二次創作のチートテンプレ転生物多いな……ってさ」

「突然来て何を言うかと思えばそんな事が、なんともしょうもない……」

確かに最近ゲートオブバビロンはFateのアーチャーの無限の剣製とか慢心王の王の財宝とか、ねぎマ！のナギとラカンの能力とか仮面ライダーだとかFFだとかDQだとかアンリミテッドブレイドワークスだとか

色々なアニメやゲームから最強級の能力を選びすぎて主人公に付与するものが多くなったとは思うが……まあ所詮は二次創作だ、俺としてはあんまり気にして無かったが……どうやらこいつのお気に召さないらしい。

「だから……やってみようと思うんだ」

「俺の話は無視か？無視なのか？」

相変わらずの天上天下唯我独尊を地で行くやつだな……一回語りだすと語り尽くすまで止まらないから軽く聞き流しておくか。

「チートじゃない転生、テンプレじゃない転生を」

「……（もういいや、好きに言わせておこう）ふーん、で？」

俺は放心モードに入ります、だから勝手に話しておいてください。  
あ、ちなみに会話の内容はICレコーダーをつけとくから後で暇な時にでも聞くよ？

「だから宏樹、お前には転生してもらおう」

「へー、それって面白いのー？（棒）」

「ああ、私にとってはとても面白いことだ。ただし転生と言っても容姿は変わらないし特別な能力も付かない」

「ふーん、で？（棒）」

「唯一あるとすればオリ主補正かな？この補正が強ければ強いほど親から多くの力を引き継いだり、その世界の主人公と仲良くなれたり、原作にあるであろう騒動やイベントにも巻き込まれるだろう」

「へー、それって美味しいの？（棒）」

「私にとってこれほど美味しい事は無いだろう！宏樹が一人わけもわからないまま主人公であるその人物にお節介を焼いていく……おっと、想像しただけで涎が……しかし心配なのはその主人公が女だったら間違い無く惚れてしまう事だな、それ程までに宏樹のお人好しは高いレベルだ。いや寧ろ女たらしの域に入っているな。学校では相談に乗って貰った女や助けて貰った女、更には男にまで好意を寄せられていたからな。まあ私という高すぎる壁が立っていたせいとか何もしてこなかったが。しかしお前は（ry）」

暴走中です、暫くお待ちください

「そーなのかー（棒）」

「そうなんだぞ宏樹、私もお前と離れるのは非常に惜しい。だがこれも最近のマンネリ打破のためだ、まあ宏樹の嫁の座が危うくなったら神様見習いの私もその世界に介入するから安心しておいてほしい」

「お前のその言葉、信じさせて貰うぜー（棒）」

「これだけの説明でわかってくれるとは伊達に私の幼なじみをやっていないな。よし、今日から3日後に転生の儀式を行うから楽しみしておいてくれ！」

「おう、分かったんだぜー（棒）」

.....お、声が聞こえないと思ったらいつの間にかいなくなつてやがる。えっと今の時間は、なん.....だと.....？二時間も経っている.....だと.....？まさか過去最高記録を更新するとは.....流石に予想してなかつたぜ。

さて、明日も学校だし晩飯作つて風呂入って寝よう。朝も早く起きて弁当を作らないといけないからな。



テンプレ？

俺の幼なじみがマシンガントークの時間を更新した三日後、俺はその事を思い出し暇だったのでICレコーダーに録音しておいた内容を聞くことにした。

『宏樹、お前には転生してもらおう』

「……………はあ？」

聞き始めたと思ったらいきなりの爆弾発言、これはヤバイ気がする。

く  
く  
く

っと、電話がかかってきたみたいだ。誰かな？一応ICレコーダーは切っておこう、聞かれたら嫌だしな。

『神城雪乃』

ん？腐れ幼なじみじゃないか、珍しいな俺の携帯に電話してくるなんて。いつもなら直接言いにくるのに。

「どうしたんだ？つか俺に電話するなんて珍しいな」

『聞いてくれ宏樹！ついに準備が整ったぞ！今すぐ私の部屋に来てくれ！』

ブツッ

……なんだったのやら、とにかくICレコーダーを聞くのは後回しだ。あいつを待たせるとろくな事にならないからな、さっさと準備して行くか。

財布は持った、携帯も同じく、よし準備完了だ。

つと、一応言っとくか。

「行ってきます」

俺は両親と妹の写った写真に向かって言い、家を出た……

つて言っても家が隣だから家から出たら十秒以内にインターホンを押せるんだが。

ピンポーン

……十秒、二十秒、三十秒、出てくる気配、無し。  
はあ、仕方ないから合鍵使って入るか……

「おーい雪乃ー来たぞー返事しろー」

『来たか宏樹！私の部屋に来てくれー！』

「了解したー！」

さて、雪乃の部屋に行くか。確か部屋は……二階の突き当たりの部屋だったか？ちよこちよこ自分の部屋を替えるから間違えやすいんだよね……。

うん、突き当たりの部屋に『雪乃の部屋』という板が掛けられているからここだな。よし、入るか。

ガチャ 俺が部屋のドアを開ける音。

ボタン！ 俺がすぐに部屋のドアを閉めた音。

……今俺が見た光景をありのまま話すぜ。

ドアを開けて雪乃の部屋かと思っただら黒魔術をやっつけていそうな部屋だった。

何を言っているか分からないと思うが俺にも何が起こったか分からない。

模様替えをしたとか部屋が交換されていたとかそんなチャチなもんじゃねえ……もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

『どうしたんだ？宏樹、ドアを開けたと思ったら直ぐに閉めて』

中から雪乃らしき人物の声が聞こえる。嘘だろう……？ついにあいつが黒魔術にまで手を出したなんて……

「いや、今見た光景が信じられなかったただけだ。きっと俺の見た幻想だろう」

『そうなのか？』

「ああ、すぐに入るから待ってくれ」

ドアOPEN、即座にCLOSE

「ハハハ……疲れてるのかな……俺」

未だに雪乃部屋が見えないや……真ん中に魔方陣的な物があるのは

俺の幼なじみの部屋じゃないもんな……

俺が部屋の前でうだうだしているところぞの魔砲少女のコスプレをした雪乃が部屋から出てきた。

「全く……どうして部屋の中に入らないんだ？ここは私の部屋だぞ？」

「……ウズダドントゴドーン！」

「いきなりオンドウル語を話すな、驚くじゃないか」

「話したくもなるわ！何でお前の部屋がこんなに変わっているんだよ！」

「とりあえず部屋に入れ、話はそれからだ」

クツ、そのコスプレをした状態で言われたら従うしかないじゃないか！

「……分かったよ」

「さて、雪乃……どうしてこうなったか説明してもらおうか」

雪乃のベッドに二人で腰掛けながら俺は話を切り出した。

「この部屋のことか？それとも私の格好のことか？」

「んなもん両方に決まってるだろボケ！何で黒魔術みたいな部屋にしたんだよ！それとそのコスプレ、スカートが短いからエロいんだよー！」

こいつのしているコスプレは魔砲少女のバリアジャケット、しかもSTS時代にでてきたアグレッサーモードのためスカートが短く、更に白ニーソで絶対領域まで作っているから悲しかな、男の性でそこに目が行くし……なんだかムラムラする。

ん？何でムラムラするんだ？雪乃のこういうコスプレは何度も見て

いるのじゃないって……

「……さしずめどうしてムラムラしているか分からないんだろう？」

「！？」

ど、どうして俺の考えた事が分かったんだ？

「それはなあ……」

「……それは？」

……ゴクリ

「私の魅力に気付いたからだ！」

「……へえ」

なんだか一気に冷めてきた。



「うおー！何だその反応は！」

「いや、雪乃の魅力は全部知ってるつもりだったからな。確かに新しい一面を見て嬉しいが」

だってそうだろう、今までずっと一緒に居たんだからな。

「また宏樹は齒が浮くようなセリフを……それだから他の女からも好意を寄せられるんだっ」

「何か言ったか？」

「別に何も言っていない！」

呆れた様な顔から急に怒り顔に、わけがわからないよ。

「……そうだ宏樹、その魔方陣の真ん中に立ってくれないか？」

「え？どうしてだ？」

「立ってくれないか？」

「……ハイ」

何だかお怒りのようなので大人しく言う事を聞くことに、本当はこんな怪しい場所に立ちたくないんだが……

「よし、真ん中に立っているな。」

……これより転生の儀式を始める」

ほら、明らかに怪しい言葉がでてきたじゃないか。

「マテエ！どうしてこの流れで転生なんだよ！つか儀式しただけで転生出来るのかよ！」

「三日前に話したじゃないか、今日宏樹を転生させるって」

三日前って……俺が安心してた時のあれか！そついや冒頭から転生してもらったか言っていましたねえ！

「ハッ！でも俺がこの魔法陣から出れば解決するじゃないか！ほーら右足を一步踏み……出せない！？どうなってんだよ！？」

つか金縛りにあったみたいに全身がピクリとも動かないんだが。

「これは忍法：金縛りの術だよ、効くかどうかは分からなかったんだけどどうまく効いてくれたみたいだね。さて、呪文の詠唱を始めようかな」

黒魔術どころか忍術まで使えるのかよ！

「o\_iみすおい、まて早まるな」

「何魔力事爾憮羅凧」

よくわからん言葉を話してやがる！？  
こんな時に唯我独尊モードになるんじゃないやねえよ！

「高鑿隋罷痲跏鳴訖」

「こうなったらもう……諦めるしか無さそうだな……」

へへへ……人間、諦めが肝心さ

三十分後……

「……簾揆糯靠。よし、完成したぞ」

「……一ついいか？」

「どうしたんだ？」

「長すぎだろ！寺のお経聞いてるくらい長いじゃねえか！」

てかよく三十分間何も飲まずにあれだけ話せたな、尊敬するわ。

「ああ宏樹、転生する前に私からも一つ言っておきたいことがある

んだ」

「……………何だ？」

どうせろくな事じゃないだろうが一応聞いてやるっ。

「実は……………転生先の世界は決定できないんだ」

「オイイイ！それはまずいだろ、もしHOTDとかバイオの世界に  
でたら即死確定じゃねえか！」

「大丈夫だ！宏樹ならきつとまともな世界に行けるってララーが言  
ってたから」

ララーなら仕方ないな……………

「って、嘘つくんじゃないやねえ！ララーがんな事言っわけ無いだろ！」

そんな事言ってたら足が透けてきやがった！？

「ん？もう時間が無いみたいだな、最後にもう一つあえて言おう、

覚えておくがいい！」

「それは俺のセリフだ!？」

俺が言い終わると同時に視界が白一色に包まれた、なんで最後の最後にブシドーのセリフなんだよ……

それを最後に俺の意識は途絶えた。

テンプレート？（後書き）

本当にどうでしょうか……！ってそのこと削除した方がいいねかな？

転生？

朝の人はおはよう、昼の人はこんにちは夜の人はこんばんは、ようするにおはこんばんちは、宏樹です。

先程雪乃の転生の儀式によって転生（？）を果たしたみたいなんだが……目を覚ましたら……なんと辺りが火の海だったんだ。

うん、自分の姿すら確認できずに死にそうだね。でも視点が低いから年齢も幼くなったんじゃないかな？俺はそう思う。

しかしいきなり死亡フラグビンビンに立っているって……俺の人生どうよ。とりあえず脱出するか、出来るか分からないけど。

さあ、覚悟を決めて……宏樹少尉、突貫します！！

「うおおおお！！」

火の海、脱却！しかし熱い、凄く熱い！だが後はこの建物から脱出するのみ、このまま廊下を突き進むぜ！



……あれ？火の無い方に逃げてきたら突き当たりだよ？どうしよう、人生ゲームオーバーじゃないか……とりあえず部屋に入るか。

……… ドアが開かない。恐らく元々は自動ドアだったんだろう、しかし今は建物が燃えているせいか電気が通っていないようので開いてくれない。

「こつなつたら力づくで……！」

ドアに力をいれ……おもいつきり横に押ししてみた。開かない。次はドアをおもいつきり引いてみた、開いた。

まさかの引くタイプのドアかよ……でもこれで部屋に入れるぜ！ま

だ生きる可能性はあるんだぜ！

部屋に入ってまず目に入ったもの、でかいカプセルみたいなもの。次に目に入ったもの、その中で浮かんでいる銀髪の少女。

なんだこれー、全く俺の脱出に関係ないじゃないか……しかし銀髪の娘可愛いな。目は開かれていないがその顔は精巧で見方によっては人形のような顔立ちに見えるだろう。

しかし今は鑑賞する時間は無い、できれば助けてやりたいがまずは脱出手段を探さないと……他にも何かがあるか探してみよう。

カプセルの周りには大量のコードがあるのみ、右にある本棚には大量のファイルがあるだけ、本棚のさらに右にある机にはカードが二枚あるだけ、机の中には……何枚かの紙、内容は……後天的リンカーコアの発現について？よくわからんな、一枚目はスルーで。二枚目は……実験結果とそれに伴う死亡者リスト！？おいおい、これ明らかに違法だろ。死亡者って、かなりヤバい研究施設みたいだな。三枚目は……これは成功者のリストのようだ。四枚目は……専用デバイスの特徴について？また分からん単語が……またもやスルーで。五枚目は……017と書かれているだけだった。これで最後か。

デバイスとリンカーコアか……何か聞いたことがあるような？

うーん、思い出せない。

で、これだけでどうすればいいんだよ……とりあえずこの少女を外に出してみよう。きっと何か知ってる！……はず。

カプセルの前にあるPCのようなものを見ると……お、英語で書かれてる。

これなら少しは読めるぞ。OPENのボタンは……あったあった、ポチツとな。

プシュー、ゴゴゴゴゴ

おー、カプセルから水が抜けていってる。あとはカプセルが開くのを待つだけだな。

約二分後

やっと水が抜けきった。

それと同時にカプセルが開いた。

さらにそれと同時に少女の目も開いた。

するとそれまでずっとカプセルを見ていた俺と目が合うわけで。

「……………」

「……………」

両者、無言。

だが先に少女の方が口を開いた。

「……………エッチ」

「開口一番がそれか!？」

もっと他にあつただろ!しかもエッチって言われてもつるぺたな胸を見て何も思わないわ!

「女の子の裸を男の子が裸で見ているなんて、エッチしか言えない」

そつえば俺も素っ裸でしたね!描写すらしなかったから忘れてたよ。

「いやこれには深い深い訳があるんだよ……………」

主に雪乃関係で

「冗談、だよ？」

「よくそんな冗談言える余裕あるな……」

さっきのはこの娘なりのジョークだったらしい。

「？君には余裕ないの？」

「言つて無かったがこの研究施設、火事で燃えてるんだぜ？信じられるか？」

「それはちよつと予想外かな？」

この事実を聞いてもそれ程動揺しないなんて、マイペースだな……この娘。

「よくそんなに動揺せずにいられるな……」

「だって、当然なもの」

「当然？」

「そうだよ、この研究所は破棄されるって聞いたことがあるから。それよりも変なのはあなた、なんで私しか居ないはずの研究所にいるの？」

破棄されるってマジかよ……てかこの少女を残したまま破棄するつもりだったのか？

「それは不幸が重なったと言わざるをえない。俺もまさかこんな場所にでるとは思わなかったんだよ」

「よくわからないけど、わかった」

……どっちだよ

「とにかくここから脱出しないか？話すにしてもいつ炎が来るか分からない場所では落ち着かないからな」

「私、道なんて分からないよ？」

……＼（＾Ｏ＾）／  
完全に詰みなんですわね、わかります

「でも道が分からないなら作ればいいだけ」

え？何言ってるのこの娘、道を作るなんて無理だろ。  
少女はそう言ってる机に向かって歩き、机の上にあった二枚のカード  
を手に取った。

「なんで二つもあるの？開発されたのは一つだけのはずなのに、ど  
うして……？」

二枚のカードをみて首を傾げる少女。  
か、可愛い……ハッ！俺は別にロリコンじゃないよ？  
きつと年相応の相手だからそう思っているだけさ！

「……別にいいや、私はミッド式しか使えないから片方は君にあげ  
る。使えるかどうかは分からないけど。はい」

「うお！？いきなりカード投げるなよ！」

しかも遊戯王のやつらみたいに鋭く投げやがって……俺の反射神経が弱かったら頭にプスツと突き刺さってたじゃないか。

「別にカードだから大丈夫。それじゃ、道を作ろうか」

「こんなカード一枚でどうやって道を作るんだよ……」

この少女に期待した俺がバカだった……

「君はデバイス、知らないの？」

「またその単語か、どこかで聞いたことがあるんだがな……」

うーん、確か雪乃に見せられたアニメにそんな名前の機械あったよ  
うな……無かったような……？

「知らないなら教えてあげたいけど説明は後。  
それじゃいくよ、セットアップ」

………は？



「いやいや、なんで一瞬で服着てるんだよ。しかもその手に持った杖は何ですか？」

「これは服じゃなくてバリアジャケット、ただの防護服。杖は……こつやっつて使うんだよ？」

少女はそう言っつて扉の右側の壁に向かってその杖を向ける。  
ん？バリアジャケット？おいおい待てよ、この世界つてまさか

「ブレイズキャノン」

ズガガガーン！！

「ほら道ができた」

「ふふふ、なんでリリ狩るマジ狩るの世界なんだよ……嫌だよ、魔王様とお話するの……」

「……」

バキッ！

「いたあ！なんでその杖で頭を殴ったんだよ、杖は鈍器じゃありません！」

「じゃあ、あの壁みたいになりたかった？」

少女が指を指した方向を見ると……大人が余裕で通れそうな穴が壁に空いていた。

「ありがとうございます、そして壁の様になるのは丁重に辞退させていただきます」

「ん、わかればいいの。  
もっと私を誉めて崇めよ」

とか言つて無い胸を張る少女。そんなつるぺたな胸を張られても何も嬉しく無いこともないから無言でこっちに向けた杖を下ろしてください。

「失礼な事を考えるからこうなるんだよ？」

なんで俺の考えている事が分かったのか聞いてはいけなйдらるか？

「以後気をつけます。」

まあ、脱出するための道もできたし外に出ようぜ！」

「あけたのは私だけどね、じゃあ行くっか」

そうして俺と少女はこの研究所（？）から脱出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7676z/>

---

きっとテンプレじゃない転生？

2011年12月25日01時51分発行